

新年明けましておめでとうございます。つい一週間前にはクリスマス、主のご降誕を共に祝ったわけですが1月1日もまた祝われるべき時だと思います。主の年2019年が今日主の年2020年に変わったわけですから。新年を迎えますと初夢あるいは今年の抱負や理想を思い浮かべたり、話したりすることがよくあると思います。教会では恒例の一人一言集を出すべく今、募集中です。何と今日が締切ですからどうぞ投稿してください。真っ白な画用紙に絵を描くようにいろんな夢を描くのも楽しいことですが年の初めにこれからの日々を過ごすにあたって原理原則、あるいはこだわりを定めておくことも大切かと思われれます。それは丁度、服を着る際、最初一つ掛け違えたら、どこまで行っても違ったままになることに例えられると思います。今朝は聖書から新しい年を過ごす上での信仰者の原理原則を考えたいと思います。

さて今日取り上げましたローマ人への手紙の8章は、この手紙全部で16章ありますがその前半の最後の章です。前半においてパウロは、主イエス・キリストによって私たちに与えられている救いとはどのようなものかを語っています。つまり、教会が信じている福音の内容を語っている部分の締めくくりが8章なのです。31節以下はその8章のさらに締めくくりです。31節の冒頭には「では、これらのことからどう言えるでしょう。」とあります。「これらのこと」とは、この手紙においてこれまで語ってきたことの全てを指していると言うことができます。キリストによる救いの福音とは要するにこういうことだ、というまとめがここでなされているのです。

そのまとめにおいてパウロが最初に語っているのは、31節後半の、「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」ということです。神が私たちの味方である、キリストによる救い、福音を一言でまとめるならこういうことなのです。この「神がわたしたちの味方であるなら」という言い方は、もしもそうであると仮定するならば、という意味ではありません。パウロが言っているのは、神が私たちの味方なのだから、誰も私たちに敵対することはできない、という確信です。誰も敵対することのできない神が自分の味方であることを確信すること、それがキリストの福音の根本なのです。

宗教改革者カルヴァンはこの言葉について次のような意味のことを言っています。「この『神が私たちの味方である』ということこそ、私たちの唯一の支えである。これがなければ、どんな幸福の中にあっても私たちに確かな支えはないが、これがあれば、どんな苦しみ悲しみ逆境の中にあっても私たちは支えられる」。このカルヴァンの言葉から教えられるのは、神が味方である、というのは、私たちの人生が順風満帆で、願いが適い、幸せであることとは違うということです。自分の望みや願いがかなっていないという世間的に見て幸せな人生においても、神が味方ではないということがありますし、逆に不幸のどん底にあると思われるような人生においても、神が味方であることがあるのです。つまり神が味方であるというのは、神が私たちの願いや計画の実現のための手助けをしてくれる、神が援軍となって自分の望みを達成させてくれる、ということではありません。そういう意味では「味方」という訳は相応しくないとと言えます。ここは原文をそのまま訳すと、「神は私たちのために居て下さる」となります。神が私たちのために居て下さる、それは私たちの願いを適えて下さるとか力を貸して下さるということではありません。神は私たちの思いや願いを超えた仕方で私たちのための救いを、助けを与えて下さるのです。ですから私たちは自分の願いへの手助けを神に求めるのではなくて、神が私たちのために何をして下さるのかを見つめていく必要があります。神が私たちのためにして下さっていることは何か、それが次の32節に語られているのです。「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょ。」。この

「わたしたちすべてのために」の「ために」が31節において「味方である」と訳されていたのと同じ言葉です。神が私たちのためにして下さったのは「御子をさえ惜しまずに死に渡された」ということです。つまり神が味方であることは、神の独り子イエス・キリストの十字架の死においてこそ見つめられるべきものなのです。私たちがどれだけ幸せな人生を送っているか、自分の願いを叶えてもらっているか、という所で神が味方であるかどうかを決めるのは見当違いなことと言えます。

神が私たち全てのためにその御子をさえ惜しまず死に渡して下さった、パウロは、クリスマスに始まり十字架の死に至る主イエスの地上のご生涯をそのように言い表しています。そこに神の大いなる恵みを見ているのです。神はそのようなことをする義務や義理は全くないのに、私たちの救いのためにそれが必要なので、恵みのみ心によってそうして下さったのです。私たちの救いのためにこのことが必要だったのは、私たちが罪人だからです。主イエスの十字架の死は私たちの罪を全て背負っての、身代わりとしての死でした。神の独り子である主イエスが、私たち罪人のために、身代わりとなって死んで下さったのです。先ほどの、私たちの「ために」という言葉は「代って」と訳すこともできます。神は私たち罪人を救うために、私たちに代って御子を死に渡して下さったのです。そのことによって、神に背き逆らい、隣人を傷つけてばかりいる私たちの罪を赦して下さったのです。御子キリストの十字架の死による罪の赦しこそがキリストの福音の根本です。それこそが「神が私たちの味方である」ことの具体的な内容なのです。

32節の「御子をさえ惜しまず」という言葉は、旧約聖書、創世記22章の話の思い起こさせます。神の民イスラエルの最初の先祖アブラハムが、年をとってからようやく与えられたひとり息子イサクを「全焼のいけにえ」として献げなさい、という命令を神から受けた話です。アブラハムにとってイサクはまさに「ひとり子」であり、神の祝福の生きた印でした。イサクの存在に神の祝福が凝縮されていたのです。そのイサクを自分の手で殺して献げよと神はお命じになったのです。アブラハムがその命令の通りにイサクを殺そうとした時に神が彼に語りかけた言葉が創世記22章12節にこのように記されています。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」。本日のところの「ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方」32節はこの神の言葉を受けています。私たちはこのアブラハムの話を読む時、息子を自分の手で殺せだって？こんなことを命じてアブラハムの忠誠心を試そうとする神はひどい、と思います。この話の本当の意味は、神のひとり子主イエスの十字架の死によってこそ示されたのです。神ご自身が、このアブラハムと同じ立場に身を置いて下さったのです。アブラハムの場合には、神はイサクの代りに献げる小羊が用意されていました。しかし神のひとり子イエス・キリストの場合には、まさに主イエスご自身が犠牲の小羊として死に渡されたのです。アブラハムが最後には免れた苦しみを、神はご自身で負われたのです。神だから、そこまで苦しまれなかったのではと思いがちですが聖書の神は人格的な神でありますから苦しまれたのです。その痛みと苦しみを私の代わりに私が受けるべき罪の罰を代わりに受けられたことにつながっています。痛みと苦しみを伴わない罰なんてありえません。しかしそのことによって、本来死ななければならない罪人である私たちが救われ、生かされたのです。「その御子をさえ惜しまず死に渡された」は、私たちの救いのために御子の命を犠牲として下さった神の愛を語っています。これこそ、「神が私たちの味方であられる」ということなのです。

このように御子をさえ惜しまず死に渡して下さった神なのだから、御子と一緒に全てのものを私たち

に賜らないはずはない、と 32 節後半は語っています。神が味方であるとは、神が全てのものを与えて下さるということです。これも「私たちが望むものは何でも」ということではありません。神は、私たちの救いのために本当に必要なものを全て与えて下さるのです。救いのために本当に必要なものとは何か。それが 33 節に語られています。「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。」。神が私たちが義として下さる、これが私たちの救いのために本当に必要なものです。「義として下さる」とはどういうことでしょうか。ここには「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。」とあり、34 節にも「罪に定めようとするのはだれですか。」とあります。訴えられ、罪に定められるという、法廷、裁判の場面が見つめられています。これは神の前での、神による裁きです。神による裁きの前に立つことが意識されているのです。それは将来、この世の終わりの時の最後の審判において、というだけではありません。私たちの日々の歩みは常に神の目の前にあります。私たちはいつも、神のまなざしの中を生きているのです。その神のまなざしに耐え得る生き方をしているのでしょうか。自分は神に対しても隣人に対しても罪を犯していない、潔白だ、無罪だ、と主張することができるのでしょうか。それはできません。私たちが訴え、罪に定める証拠は神の前にうず高く積みまれています。私たちがどれだけ神に背き、隣人を傷つけ、悪い思いを抱き、なすべき正しいことを怠っているか、そのことを一つ一つ持ち出されたら私たちはぐうの音も出ません。しかしパウロはここで、それらの全ての不利な証拠にもかかわらず、もはや私たちが訴えて罪に定めることができる者は誰もいない、裁き主である神が私たちが義として下さる、つまり無罪を宣言して下さるのだ、と言っているのです。それは、神が私たちのために御子をさえ惜しまず死に渡して下さったからです。御子イエス・キリストが私たちの罪を全て背負って身代わりになって死んで下さったからです。罪人である私たちが、主イエス・キリストの十字架の死による罪の赦しによって、神のみ前で義とされ、救いを与えられる、神が私たちの救いのために本当に必要なものを全て与えて下さるとはそういうことであり、それが、神が味方であるということなのです。

神の前で、恵みによって義とされた者としてしっかりと立つことができた人間は、人々の前でも、この世を支配する人間の権力の前でも、それに飲み込まれることなくしっかりと立つ者とされます。ルターはカトリック教会による査問を受けた時に、「私はここに立つ」、この福音にこそ立つとはっきり宣言しました。主イエスへの信仰によって神に義とされる確信に立ちました。ここに立つなら、罪に定められることを恐れることはなくなるのです。本日の箇所最後のところに語られているように、この世のどんな被造物も、キリスト・イエスによって示された神の愛から私たちを引き離すことはできないからです。これがキリストによる救いの福音の中心です。

これからどんなことがありましても神が味方でいて下さることを心に留めたいと思います。たとえ思い通りの人生を歩めなくても、悲しみに沈みこんでいる時にも神は私たちの味方であり、それは神が御子イエス・キリストを十字架につけることによって私たちが義として下さったということです。願わくは新しい年、その神の愛の深さに目を開かれていくことを祈り求めたいと思います。